ワルラスと進歩

御崎　加代子

I　はじめに

本稿の目的は，レオン・ワルラス（Léon Walras, 1834-1910）が，その経済学形成過程において「進歩する社会」の分析を指向しつつ，なぜ一般均衡理論という静的なモデルを構築するに至ったのかということを考察することである。

教科書的な解釈によれば，ワルラスが純粋経済学を構築する際に念頭にあったのは，静態経済の分析であり，そのための静学的なモデルが一般均衡理論である。[1)]

しかし，ワルラスを進化主義者として位置づけようと試みる Jolink（1996）でも強調されているように，ワルラスの経済学体系（純粋経済学，応用経済学，社会経済学）を統一的に理解しようと試みれば，このような解釈をそのまま受け入れることはできなくなってしまう。なぜなら後者2つが動的な要素を扱っているため，純粋経済学との関連づけが不可能になってしまうからである。

興味深いことに，このような問題は，Morishima（1977）のように，その研究対象を純粋経済学のみに限定しても生じる。『純粋経済学要論』（初版1874-77，以下『要論』と略記）には，静的な一般均衡理論のみならず，動態経済を扱った「進歩する社会の価格変動の法則」が最後部に含まれるからである。この法則の位置づけについては，ジャッフェ＝森嶋論争（1980）の核心にもなった。「進歩する社会の法則」の重要性を強調し，ワルラスの念頭にあったのは成長モデルの構築であると主張した森嶋に対し，ジャッフェは，この法則が『要論』の「コーダ」にすぎず，静的な一般均衡理論にワルラス純粋経済学のエッ

1）例えば，Schumpeter（1954）。

センスがあることを主張した（Jaffé 1980, Morishima 1980）。

またさらに，ワルラスの一般均衡理論そのものについての従来の解釈，特にその静的な枠組みを強調するジャッフェの解釈に異議を唱え，その現実的動学的枠組みを強調する Walker (1996) の研究もある。[2] そもそもワルラスの『要論』に展開された一般均衡理論が，時間の存在しない静学的な体系として理解されるようになった背景には，模索過程において，均衡が成立するまで一切の交換・生産活動が行われないと言う非現実的な仮定がある。しかし Walker (1996) は，初版から第4版までの『純粋経済学要論』の形成過程に焦点をあて，このような非現実的な仮定を象徴するいわゆる「条件付き取引証書（written pledge）」は，第4版以降に導入されたことを指摘した。通説とは逆にワルラスは，当初，不均衡過程についての現実的な議論に興味を持っていたのであるが，晩年になってから，抽象的・形式的アプローチへの傾向を強めていったというのが，ウオーカーの考え方である。

本論文ではこれらの研究をふまえ，ワルラスの純粋経済学構築の思想的背景に言及しつつ，彼がいかに進歩という概念に支えられて，自らの思想を純粋経済学に結晶させていったかを明らかにする。

II　純粋経済学設立の2つの動機

『要論』は，一見矛盾する二つの部分によって構成されている。

ひとつは，第II編から第VI編（第4版）までに展開された，交換，生産，資本形成および信用，貨幣の理論であり，のちに一般均衡理論と呼ばれるようになった部分である。ワルラスはこの中で，市場の参加者全員が与えられた所得制限のもとで満足を最大化し（主体的均衡），全ての市場において財とサービスの需給が均衡していること（市場均衡）を，連立方程式の形式で表現し，未知数と方程式の数が一致することによって，均衡解が存在すると考えた。彼はこのような議論を理論的解決と呼び，このような議論により説得力を持たせるた

2）Walker (1996) によれば，ワルラスは模索過程の分析を dynamic theory と呼んでいた。(p. 271)

めに，市場の解決と呼ばれる議論を導入した。これは実際の市場においてどのように均衡解に到達するかということを描写したもので，いわゆる模索過程（tâtonnement）と呼ばれるものである。ここでは，任意の不均衡状態から出発して交換の当事者による競り上げ競り下げを通じて[3]，均衡が確立される。ここで均衡価格が成立するまで実際の経済活動は一切行われず，時間の経過を伴う条件の変化は一切考慮されないという仮定によって，ワルラスのモデルは時間の存在しない静学として位置づけられるようになった。

もうひとつの部分は，同書第Ⅶ編「経済的進歩の条件と結果」であり，ここには，「進歩する社会の価格変動の法則[4]」と呼ばれるものが含まれている。

「進歩する社会においては，労働の価格すなわち賃金は目立って変化せず，土地用役の価格すなわち地代は目立って上昇し，資本用役の価格すなわち利子は目立って下落する。…進歩する社会において，純収入率はめだって下落する。」

（Walras, L. 1988, p. 597. 久武訳, p. 412.）

この法則の意義を最初に取りあげたのは，Morishima（1977）であろう。彼は，ジャッフェや他の多くのワルラス研究者が，『要論』の第Ⅱ編から第Ⅵ編の一般均衡理論を，最も重視してきた事実を指摘し，それに対して，第Ⅶ編をワルラス体系の中核と位置づけ，「進歩する社会の価格変動の法則」を重視した。そしてワルラスが意図していたのは，静態モデルではなく成長モデルの構築であるという独自の解釈をうちだし，『要論』の究極的目標は，現実の資本主義経済の運行の仕方を検討することであることを主張して，ワルラスの静的なモデ

3）Walker（1996）でも指摘されているように，ここで価格を叫ぶのは，交換の当事者たちであり，一般に信じられているように，特定の「競り人」は存在しない。さらに言えば，全ての人間が価格受容者だとはいえないのである。この問題については稿を改め議論する予定である。

4）ワルラスがここで言う「進歩」とは，「人口が増加しつつあるときに生産物の稀少性すなわち生産物の最後に満たされた欲望の強度が減少すること」である。それは（狭義の）資本の量の増加が，人口増加を超えることによって可能となる（『要論』第36章）。この法則についての詳細は，御崎（1996a）を参照されたい。

ルにユートピアの表現を見いだすジャッフェと対立した。

この問題を，ワルラスが純粋経済学を設立する以前の思想的な背景にまでさかのぼって考察すると，興味深いことがわかる。この2つの要素は，ワルラスが純粋経済学の構築を決意した2つの動機にほかならないのである。

「自伝ノート」によれば，ワルラスが数学的な純粋経済学の設立を決意したのは，1860年最初の経済学上の著作『経済学と正義』を執筆したころである。

「一部はまさにこれ（『経済学と正義』）を書いているときに，また一部はこれを出版した後に，私は人口と富が増大するにつれて地代と地価が上昇する事実と，農業，工業および商業生産に関して自由競争の制度を採用することによって最大の効用が得られると言う事実を，数学的に証明すべき二つの事実として認識し，数学の形式で創設すべき純粋および応用経済学を直感したのである。」

(Walras, L. 1965, p. 2, 御崎訳, 1991, p. 8.)

すなわち人口増加と資本蓄積にともなう地代と地価の上昇と自由競争の効率性の証明が，純粋経済学設立の2つの動機であった。前者は，「進歩する社会の価格変動の法則」として，後者は，一般均衡における各人の効用最大化として，それぞれのちに『要論』に結実することとなった。このように『要論』の中で一見矛盾して存在する2つの部分は，そのままワルラスが純粋経済学を設立しようとした2つの動機に対応しているのである。

1．進歩する社会

『経済学と正義』(1860) の中でワルラスは，父オーギュストが『社会的富の理論について』(1849) の中で述べていた「資本と収入の価値変動の法則」を再び取りあげている。これは，『要論』における「進歩する社会の価格変動の法則」の原型とも言うべき法則である。この法則によって，オーギュストが主張しようとしたのは，価値の原因を稀少性に求めれば，資本蓄積と人口増加にともなって上昇するのは，地代と地価だけであり，賃金は一定，利潤は低下するとい

うこと，その結果，進歩する社会において有利となるのは，地主だけであり，土地を国有化すれば，人々の経済的不平等はなくなるということである。

この土地国有化こそが，ワルラス父子の「科学的社会主義」の中核をなすものであった。注目すべきことは，ワルラスが，この法則を当時「アポステリオリに認識できるもの」(Walras, L. 1860, p. 159) としてとらえていたことであり，これに先験的な根拠を与えることこそが自らの使命だと考えたことが，純粋経済学設立の動機につながってゆくことである。

この法則はリカードと同時代人である父オーギュストにとって，目新しいものではなかったであろう[5]。しかしワルラス父子はそこから，資本所有を擁護し，土地国有化のみが労働者を困窮から救うことを主張しようとした。しかしこのような主張は，同時代人からは受け入れがたいものであった。父の社会主義を真に「科学的」なものにするためには，その「法則」を説得力のあるかたちで示すことが息子ワルラスの切迫した課題となったのである。このようにワルラスにとって，純粋経済学の出発点にあるのは，「進歩する社会の法則」という動的で，経験的な経済秩序の把握である。

2．自由競争の効率性

ワルラスは，『経済学と正義』を当時の社会主義者の大御所プルードンにあてて書いたにもかかわらず，その出版後，本人からは反応を得られなかった。その一方で，ワルラスの進むべき道を決定することになるコメントを，ランベール・ベイというサンシモン主義者から受け取っていた。それは，自由競争が価格と生産量を決定するひとつの方法ではあるが，それが最良であることは誰によってもまだ示されていないということであった。これに対するワルラスの答えが，のちに『要論』の中で示された一般均衡モデルにおける各人の満足の極大である。

ワルラスはこのことについて，晩年，次のように説明している。

---

5) この法則とリカードとの関連性の問題については，Morishima (1989) も参照のこと。

「自由競争は，それが組織され行使されうる場合には，用役と生産物の効用の最大量を得るということです。この効用の最大量は，稀少性あるいは満足させられた最後の欲求の平均強度に対して価値が比例すると言うことの結果として生じたものです。」　(Walras, L. 1987, p. 508. 御崎訳, 1991, p. 27.)

これは，言うまでもなく限界効用均等の法則を指している。ワルラスは，この法則の確立によって，限界革命の担い手の一人に名を連ねることになったのであるが，これは，それまで父オーギュストの強い影響の下に経済学を学んできたワルラスの経済理論を，父よりも優れたものにした点でもあった。すなわちオーギュストは，「進歩する社会の法則」を述べる際に，稀少性と言う概念を使ったが，それは絶対需要と絶対供給の比率として考えられていた。ワルラスは，その稀少性概念に限界効用と言う新しい意味を付け加え，それが一般均衡理論の完成へとつながったのである。[6)]

ワルラスがこのような法則の確立に闘志を燃やし続けた背景には，資本所有を否定する当時の社会主義者への批判があった。ワルラスは，「進歩する社会の法則」によって，資本所有が正義に反しない（経済的不平等を拡大しない）ことを示すだけでなく，資本所有を前提とする市場というものがいかに効率的なものであるか，その有利さを示す必要があったのである。[7)]『要論』の第Ⅴ編（第4版）「資本形成および信用の理論」において，資本財市場の自由競争について，彼は次のように言っている。

「経済学者が主張はしてきたけれどもまだ証明しなかった重要な真理が，社会主義者が否定するところであるにもかかわらず，ついに確立されたのである。すなわち，自由競争の機構は，一定の条件と一定の限界内において，貯蓄を狭義の資本に転化し，また用役を生産物に転化する自動的機構であり，自動調整

6) その格闘の過程に関しては，Jolink (1991) を参照のこと。
7) ワルラスのマルクスに対する市場の有利さをめぐる議論については，御崎 (1992) を参照のこと。

者である。このようにして，交換および生産に関してと同様に，資本形成および信用に関しても，純粋経済学の結論は応用経済学の出発点を我々に与えてくれる。前者に関しても後者に関してもこの結論はまた，社会経済学がしなければならない仕事を明確に示してくれる。交換と生産とに関する自由競争は，全ての交換者に対し，全ての用役と全ての生産物の交換比率がただ一つしかないと言う条件のもとに，用役と生産物の効用の最大を獲得させる。資本形成および信用に関する自由競争も同様に，全ての貯蓄形成者に対して，純利子と資本との比率がただ一つであるという条件のもとに，新資本の効用の最大を獲得させる。[8] これらの条件は，正義にかなうだろうか。これが社会的富の分配の道徳論の答えるべき問題である。そして，これに答えて始めて社会的富の生産の経済理論は，農業に，工業に，商業に，銀行に，そして投機に，自由競争の原理の適用を思い切って細部にまで押し進めて行くことができる。」

(Walras, L. 1988, p. 425. 久武訳, p. 310.)

III　進歩と均衡—資本形成

このように，ワルラスが純粋経済学に取りかかった背景には，進歩の概念の定式化と，主体的均衡によって表現された，自由競争の効率性の証明と言う問題があった。しかしこの進歩と均衡という異なった性質をもつ二つの概念を，同じ『要論』体系の中で取り扱うことはできるのであろうか？

このような問題を考える上で有効なのが，『要論』第V編（第4版）「資本形成および信用の理論」における資本形成モデルの考察である。すでにワルラスは，それ以前の章で交換と生産の理論を展開していたが，ここでは同じ一般均衡モデルの枠組みの中で，純貯蓄の存在と新資本財の生産という「進歩する社会」の条件を取り扱おうとするのである。

しかしこの資本形成モデルは，動学モデルとしての現代の成長分析とは違って，時間の経過につれての動きを求めるべき変数が含まれていないことがしば

8）純収入率の均等がはたして，新資本財の最大効用をもたらすかどうかについての問題は，Walker (1996) chap. 10 で論じられている。

しば指摘される。このモデルにおいては，ある一点における新資本財の価格のみが問題とされ，所与の条件が均衡に達するまで変更されないのである。

「前と同様に，この場合も交換の均衡および生産の均衡に到達したときと同じ方法で，すなわち一定の期間中，問題の任意に定めた与件を不変であると仮定し，これらの与件の変化の影響を研究する目的で与件を変数とみることは後に譲って，まず資本形成の均衡に到達することが問題である。なおまた，資本形成においては，生産において用役が生産物に変形されたのと同様に，用役の新資本への変形が行われる。ある純収入率と用役のある価格が叫ばれ生産物および新資本のある数量が製造されるとき，もしこの率と価格と数量が均衡における率と価格と数量でないならば，他の率と価格を叫ばなければならないだけでなく，生産物と新資本の他の数量を製造しなければならない。」

(Walras, L. 1988, p. 377. 久武訳, pp. 280-281.)

ではこのような不均衡状態から均衡へは，どのように至ることができるのであろうか。Walker (1996) で指摘されているように，ワルラスはこの資本形成モデルにおいても，第4版以降，「取引証書」の導入によって，均衡状態においてのみ実際の生産・交換活動が行われることを強調する。彼は，次のような文を先の引用の直後に付け加えている。

「この第1の困難を解決するために，新資本を製造する企業者はこれらの生産物の次々に現れる数量を取引証書 (bons) で代表させ，それは最初に偶然に決定され，次に販売価格と生産費を超えているか否かに従ってこれを増加または減少することによって，販売価格と生産費が均等になるように至らしめると想定すればよい。また地主，労働者および資本家も，同様にその用役の次々に現れる数量を取引証書で代表させ，その数量は最初に偶然に叫ばれた価格に対応し，次には価値尺度財であらわした新資本額の需要が供給を超えているか否に従ってその価格を引き上げまたは引き下げて，ついには需要と供給が一致する

と想定すればよい。第2の困難すなわち新資本の生産に要する時間の経過に関する困難は，生産物の場合と同様に生産が即時に行われると仮定することによって取り除かれる。」　(Walras, L. 1988, p. 377. 久武訳, p. 281.)

すなわちここでワルラスは生産期間を全く捨象してしまうのである。これによってワルラス・モデルは静学モデルとして位置づけられるようになったのであり，他の経済学者を彼の資本理論から遠ざけることにもなった。

驚くべきことに，ワルラス自身は，経済が進歩的であっても，なおもそれを静態的に取り扱うことができると考えていた。

「このようにして，資本形成の均衡はまず原理上成立する。次に考察される一定の期間において問題の与件に何らの変化もないとすれば，この期間中に集積されるべき貯蓄と提供されるべき新資本との相互の引き渡しによってこの均衡は有効に成立する。この場合に，新資本は考察された期間の次の期間においてしか働きをしないのであるから，経済状態は進歩的 (progressif) になってもなお静態 (statique) のままである。」

(Walras, L. 1988. p. 377. 久武訳, pp. 281.)

つまり，ワルラスは，資本財の量が均衡に至る間一定であるという仮定を基本に，これから生産されるべき新資本財の均衡量，それに対する純貯蓄，従って資本ストックの均衡量を決定しようとするのである。すなわち新資本財の生産を想定しつつ，均衡に至る過程において資本ストックの量も一定であり，新資本財が全く存在しないと考えるのである。[9] しかしこれは，資本ストックの量が実際にずっと一定であるという意味ではなく，均衡が成立した後の次の期間に入るまで影響を与えないと言うことである。変化は移り変わる均衡のつなぎ目にのみ現れる。従ってワルラスのいう「静態」は，通常の意味とは違ってお

9) このようなワルラスの資本理論を，静態モデルととらえるか，一時均衡モデルとしてとらえるかという問題については，根岸 (1985) を参照のこと。

り，進歩とは矛盾しないものとしてとらえられているのである。

ワルラスは，このように均衡の連続を経済と考えている(van Witteloostuijn, A. and Maks, J.A.H. 1990)。ワルラスの資本形成モデルにおける均衡を「一時的均衡」と位置づけた森嶋が，ジャッフェとの論争において，強調したように，ワルラスはここで「時間を通じて可変的な均衡」を考えているのである。

しかしここで注目すべきなのは，その均衡の連続がそのまま現実経済に対応するのではないということである。彼は『要論』第7編「経済的進歩の条件と結果」の最初の章において，次のように「動態」の定義をする。

「最後に，現実にますます接近するために，一年を期間とする市場の仮定から常設市場（marché permanente）の仮定に，すなわち静態の仮定から動態（l'état dynamique）の仮定に移らなければならない。……問題の基本的与件が各瞬間において変化しているものと考えよう。……あらゆる時間，あらゆる瞬間において，運転資金の諸部分の一部が消滅したり再び現れたりしている。人的資本，狭義の資本，貨幣も同様に消滅し再現するが，その速度ははるかに遅い。土地資本だけが，この更新が行われない。このようなものが常設市場である。それは常に均衡への傾向を示しているが，決して均衡には達し得ない。その理由は，常設市場は模索によってのみ均衡に向かうものであり，この模索が終わる以前に問題の全ての与件，例えば所有量，生産物と用役の効用，製造係数，収入の消費に対する超過額，運転資金の必要などが変化して再び模索が始まるからである。この点において，市場は湖水が風によって動かされてその水が常に静止しようとしながら決してこれに到達しないのと同様である。」

(Walras, L. 1988. p. 579, 久武訳, p. 399.)

このように，ワルラスの動態と言う概念には，均衡には決して達し得ないと言う考え方が含まれている。このような考え方は，例えばアソシアシオン時代における彼の論文から見いだすことができる。天体の法則とは違って，社会の法則には，人間の自由意志が働くので，あるがままの法則を追求することは不

可能だとかつて彼は主張した（御崎1996b）。それによって彼が意味するのは，自由競争はすでに存在する秩序ではなく，人間が決して到達できない極限状態だということである。

実際，『要論』においても，ワルラスは次のように述べている。

「ある人はいう。『しかし，絶対的自由競争は厳密にいえばひとつの仮説にすぎない。現実においては，自由競争は無数の撹乱原因によって妨げられている。故に，どのような方式でもあらわし得ない撹乱要因を取り除いた自由競争そのものだけを研究することは，好奇心を満足する以外には何らの利益もないと』と。この反対論の内容の空虚なことは自明である。今後科学がどのように進歩してもこの撹乱要因を交換方程式および生産方程式に導入し表現することができないと仮定すると—これを主張するのはおそらく軽率であり，たしかに無益である—われわれが確立した方程式は少なくとも生産の自由と言う一般的なそして優れた準則に導く。自由は一定の制約のもとで最大効用を獲得する。それゆえこれを妨げる原因は最大効用に対する障害である。そしてこれらの原因がどのようなものであろうとも，できる限りそれを除去することが必要である。」

（Walras, L. 1988, p. 334-335. 久武訳, pp. 251-252.）

ワルラスのいう自由競争あるいは均衡は，理念的状態であり，そこには不確実性など人間の自由意志にかかわる要素が入り込む余地がない。それはここで言う「撹乱要因」に分類されるべきものであろう。しかしワルラスは，ジャッフェの主張とは違って，そのような理念的状態のみに興味があったのではない。その均衡の連続をもって，現実の動態経済へ接近しようとしたからである，しかしその均衡がいかに移動するのか，あるいは不均衡の状態からいかに均衡に達するのかと言う問題についての考察は，ついにワルラスによってはなされなかったのである。

IV　結論

ワルラスは純粋経済学に取り組む際，経験的にとらえられた「進歩する社会」の分析を出発点としたが，同時に，均衡という理念的な概念を使って自由競争を取り扱おうとした。そして両者の接続には成功していない。そういうわけで，『要論』には，ジャッフェと森嶋の論争でも扱われた，経験的な要素と理念的な要素が併存しているのである。

ワルラス経済学を「進化主義経済学」という言葉でとらえようとしたJolink (1996)の言葉を借りれば，このような要素を「進歩」と「完全性(perfectibility)」いう言葉で表現することができよう。ワルラスの経済学が，「進化主義的」である理由のひとつは，それが対象としている「進歩」が単なる「改善」のみで終わるのではなく，究極的にはユートピア状態に至ることが想定されていることにあるというのが，ジョリンクの考え方である。従ってワルラスの純粋経済学は，単に進歩の描写だけを目的としているのではなく，その過程において不断に接近するべき完全性の提示と言う目的ももっている。具体的には，19世紀フランスが，農業段階から工業段階という新しい経済段階に移行するにあたっての，ひとつの組織形態として自由競争制度を提示するという役割を，ワルラスは自らの純粋経済学に与えていると考えられるのである。

このようにジョリンクは，ワルラスにおける進化あるいは進歩という概念を，歴史的な次元でとらえようとし，その文化史的な意味合いを探ろうとしているが，ワルラスの経済学体系の中では小宇宙にすぎない『要論』の世界においても，この進歩と完全性という概念は，前者が，資本ストックの増加という経済的なタームからとらえられた進歩，後者が，均衡に対応すると言う形で，確かに存在しているのである。

Walker (1996) は，ワルラスが現実には均衡状態にたどり着くことは決してないことを強調することにより，自らの経済学の目標が不均衡分析にあると実は信じていたのだと主張し，後期のワルラスが理念的な傾向を強めていったことを「堕落 (decline)」と断定したが，これはあまりにも一面的な解釈であろ

う。少なくともワルラスにとって，一般均衡理論は現実の経済を描写，分析するための単なる道具ではなく，それ以上の意味を持ったものだったからである。彼は19世紀当時の社会主義とバスチアを代表とするフランス正統派経済学の自由放任主義の両方を批判的に接収して，全く新しい経済学を作ろうとし，それを社会改革の基礎理論にしようとしていた。それがワルラスが目指した「科学的社会主義」の意味するところである。[10] 彼にとっては必要だったのは，現実の描写ではなく，それを越えたものであり，それこそが，自由競争制度のもとでの一般均衡の概念である。人間はそこに至ろうとしても決して至ることはないが，それを提示することは，現実社会の改革と進歩にとって必要不可欠なものであった。

そして資本形成がもっとも効率的に行われる自由競争市場は，資本所有を否定する同時代の社会主義者たちへのアンチテーゼでもあり，公正な分配と矛盾することなく生産力の増大を保証するシステムを探求していたワルラスのひとつの答えであった。

このようにワルラスの「科学的社会主義」にとって，必要不可欠だったのが均衡分析である。それは歴史の中の，人間の意志に左右されない不変の事実を対象とする。それによってこそ，所有制度などの道徳的議論が可能になると彼は考えたからである。しかしそれは，ワルラスが社会の変化を考慮しなかったことを決して意味するものではない。

引用文献

(1) Jolink, A. (1991) *Liberté, Egalité, Rareté-The Evolutionary Economics of Léon Walras: an analytical reconstruction*. Amsterdam.

(2) Jolink, A. (1996) *The Evolutionist Economics of Léon Walras*. London and New York.

(3) Jaffé, W. (1980) Walras's Economics as others see it. *Journal of Economic Literature*, vol. XVIII, no. 2.

(4) 御崎加代子 (1991)「レオン・ワルラス自伝資料」『一橋大学社会科学古典資料センター Study Series』No. 25。

10) ワルラスの「科学的社会主義」の背景については，御崎 (1995a, b) を参照されたい。

(5)　御崎加代子（1992）「ワルラスと国家―平等・競争・企業者」『経済学史学会年報』第30号。
(6)　御崎加代子（1995a）「（ワルラスの経済思想　連載第1回）ワルラスの生涯（上）―純粋経済学と科学的社会主義」『経済セミナー』no. 490.
(7)　御崎加代子（1995b）「（ワルラスの経済思想　連載第2回）ワルラスの生涯（下）―純粋経済学・社会経済学・応用経済学」『経済セミナー』no. 491.
(8)　御崎加代子（1996a）「（ワルラスの経済思想　連載第4回）ワルラス分配理論の社会ビジョン―イギリス古典派の批判」『経済セミナー』no. 494.
(9)　御崎加代子（1996b）「（ワルラスの経済思想　連載第5回）純粋経済学の方法とアソシアシオン」『経済セミナー』no. 495.
(10)　Morishima, M. (1977) *Walras's Economics: A Pure Theory of Capital and Money*. Cambridge.（西村和雄訳『ワルラスの経済学―資本と貨幣の純粋理論』東洋経済新報社 1983年。）
(11)　Morishima, M. (1980) W. Jaffé on Léon Walras-A comment. *Journal of Economic Literature*, vol. XVIII, no. 2.
(12)　Morishima, M. (1989) *Ricardo's Economics: A general equilibrium theory of distribution and growth*. Cambridge.（高増・堂目・吉田訳『リカードの経済学―分配と成長の一般均衡理論』東洋経済新報社　1991年。）
(13)　根岸隆（1985）『ワルラス経済学入門―「純粋経済学要論」を読む』岩波書店。
(14)　Schumpeter, J.A. (1954) *History of Economic Analysis*. London.（東畑精一訳『経済分析の歴史』岩波書店　1955-62年）
(15)　Van Witteloostuijn, A. and Maks, J.A.H. (1990) Walras on temporary equilibrium and dynamics. *History of Political Economy*, 22：2.
(16)　Walker, D.A. (1996) *Walras's Market Models*. Cambridge.
(17)　Walras, L. (1860) *L'économie politique et la justice, examen critique et réfutation des doctrines économiques de M.P.-J. Proudhon*. Paris.
(18)　Walras, L. (1965) *Correspondence of Léon Walras and Related Papers, ed*. William Jaffé. Amsterdam.
(19)　Walras, L. (1988) *Éléments d'économie politique pure* (*Auguste et Léon Walras, Œuvres économiques complètes*, ed. Pierre Dockès et al,t. VIII). Paris. (*Léon Walras, Elements of Pure Economics or The Theory of Social Wealth*, translated by William Jaffé. London. 1954.)（久武雅夫訳『純粋経済学要論』岩波書店　1983年。）
(20)　Walras, L. (1987) *Mélanges d'économie politique et sociale* (*Auguste et Léon Walras, Œuvres économiques complètes*, ed. Pierre Dockès et al,t. VII). Paris.

Walras on Progress

Kayoko Misaki

This paper aims to clarify why Walras constructed his static theory of general equilibrium, though he first intended to analyze a progressive society.

Some researchers focused on whether Walras's real interest was in a stationary or a progressive economy. The formation process of his *Éléments* shows that he was first interested in the latter to prove the increasing values of land and of rent in a progressive society. Then he reached a static approach to show the efficiency of free competition. This is because he wanted to show the basis of argument about not only justice but also efficiency in his work. That caused some antinomy in his capital formation theory.

Walras described economy as a series of equilibriums. It must be noted that these equilibriums are supposed never to be reached in reality. However it is fallcious to assume that his static analysis is meaningless just because it is unrealistic and ideal. For Walras's aim as a scientific socialist consisted in formulating the perfection as a guide to social reform in a progressive society.